北山古墳群（1・2号墳）

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL（0583）83-1123
平成13年3月27日

北山古墳群発掘調査航空写真

北山古墳群の発掘調査

各務原市須衛町から蘇原北山町には、北山という標高308メートルの山があり、その南裾の斜面に北山古墳群があります。この古墳群には、３基の円墳（丸い形をした古墳）が確認されています。その内の、２基が位置する範囲にて、岩石採取工事が行われることになったため、緊急発掘調査を実施しました。発掘調査は、平成６年７月から平成７年３月にかけて行いました。

北山古墳群周辺の地形

北山古墳群は、各務原市の北部から関市や岐阜市にまたがる山地・丘陵地帯の南部に位置します。すぐ東側には、県道江南・関線という、山を越えて南北をつなぐ重要な道路が走っています。この辺りは、昔でも峠越えの交通が盛んであったことが想像されます。

また、一帯の山地には、古代の須恵器（窯により高温で焼かれた灰褐色の焼き物）の窯跡が多く残されています。これらは、「美濃須衛古窯跡群」と呼ばれ、全国的にも有数の古代窯業地帯です。

北山古墳群のある場所は、これらの地域の中心部分にあるといえます。

発掘調査の成果

発掘調査を行った２基の古墳は、東西に並んでおり、東側を１号墳、西側を２号墳と名付けています。２基とも、円墳で横穴式石室（遺体を安置する石の部屋）を造っています。

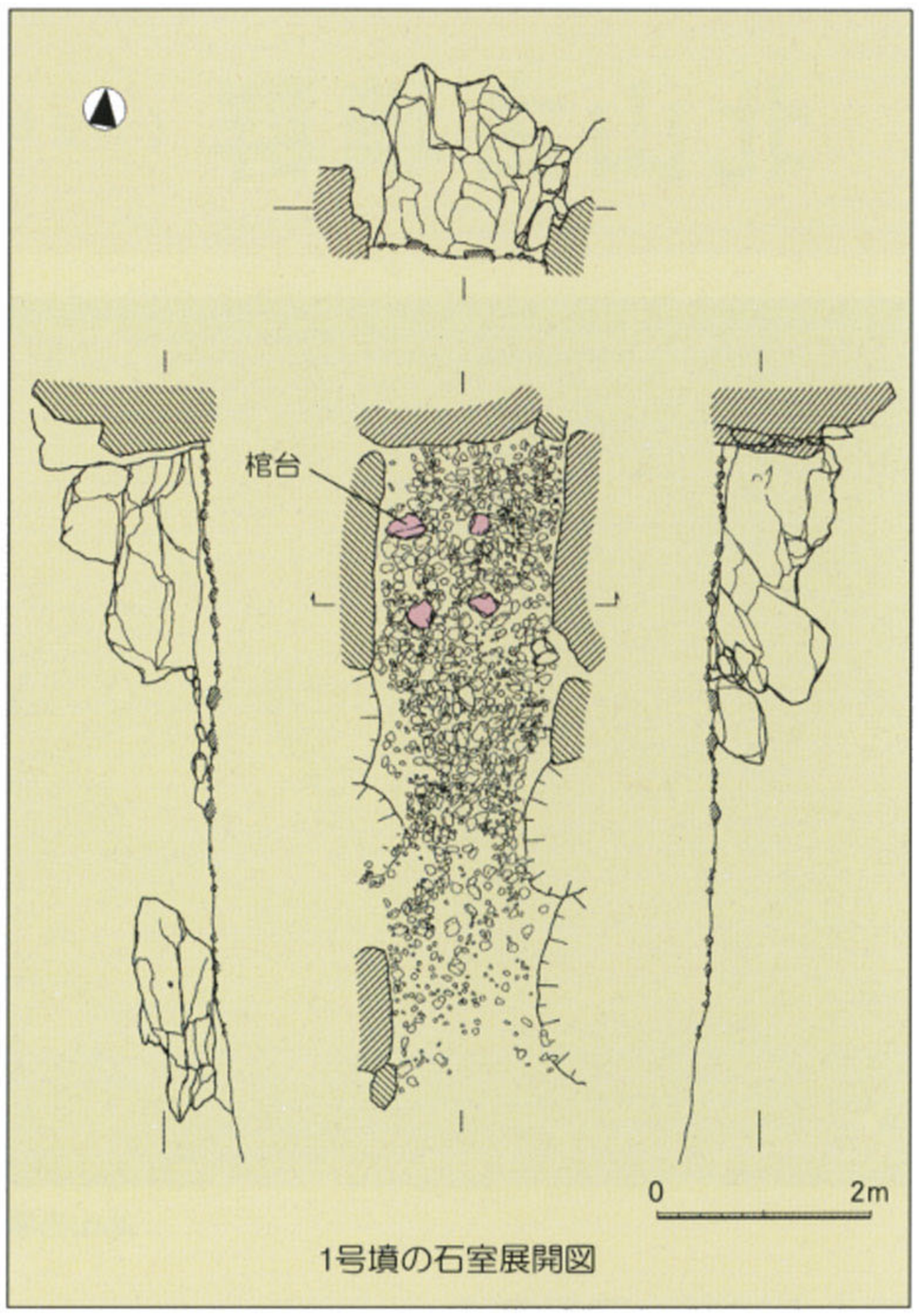
１号墳は、残念ながら残り方が悪く、盛土や石室石材のほとんどは失われていました。しかし、２号墳の方は残りが良く、古墳を造った当時に近い姿を、発掘調査によって見ることが出来たと思います。

発掘作業の風景

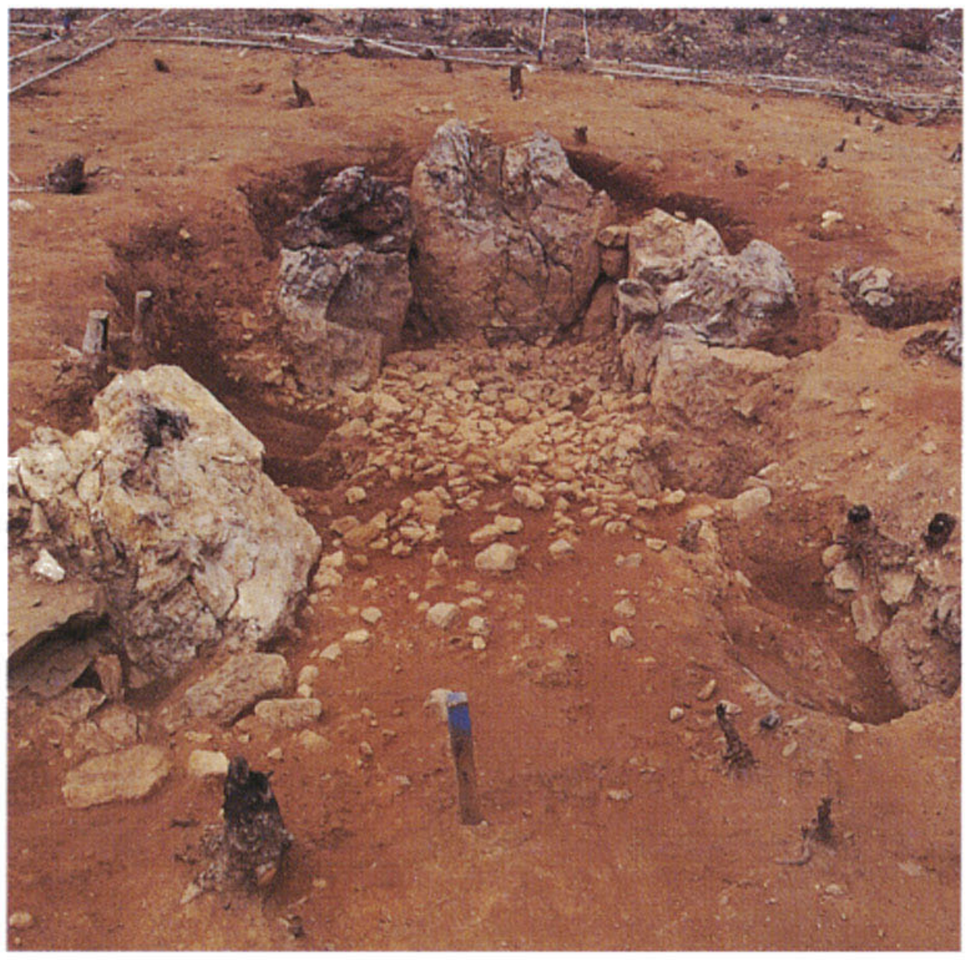
1号墳

石室奥の下方部分のみが残っていました。非常に大型の岩を組み合わせて築いた石室のようです。床の上には、石が敷き詰められており（礫床）、さらに、棺を置いた台と思われる、一回り大きな石の配列も一部が確認できました（棺台）。棺自体は、木でできていたと考えられますので、朽ちてしまい残っていませんでしたが、棺台の配置から、石室の西に寄せて置いてあったことが分かると思います。

石室は痛みが激しく、内部も荒されていたため、遺体に供えられた副葬品も、あまり残っていませんでした。わずかに残された土器の破片が、７世紀後半くらいの特徴を示すことから、この古墳が造られたのもこの頃と考えられます。



1号墳の石室展開図


1号墳石室の様子

1号墳石室からの出土品

1号墳の礫床と棺台

1号墳石室からの出土品

石室の内部には、小型の土師器（赤褐色の素焼きの土器）甕や須恵器甕の破片などが残されていました。これらは、最初の被葬者を葬る時、もしくは、追葬（後から遺体を追加して葬ること）の時に持ち込まれたものと考えられます。

また、古墳時代のものではない、室町時代の陶器が中から見つかっています。この頃にも、人が内部へ入り、別目的に利用していた証拠と考えられます。

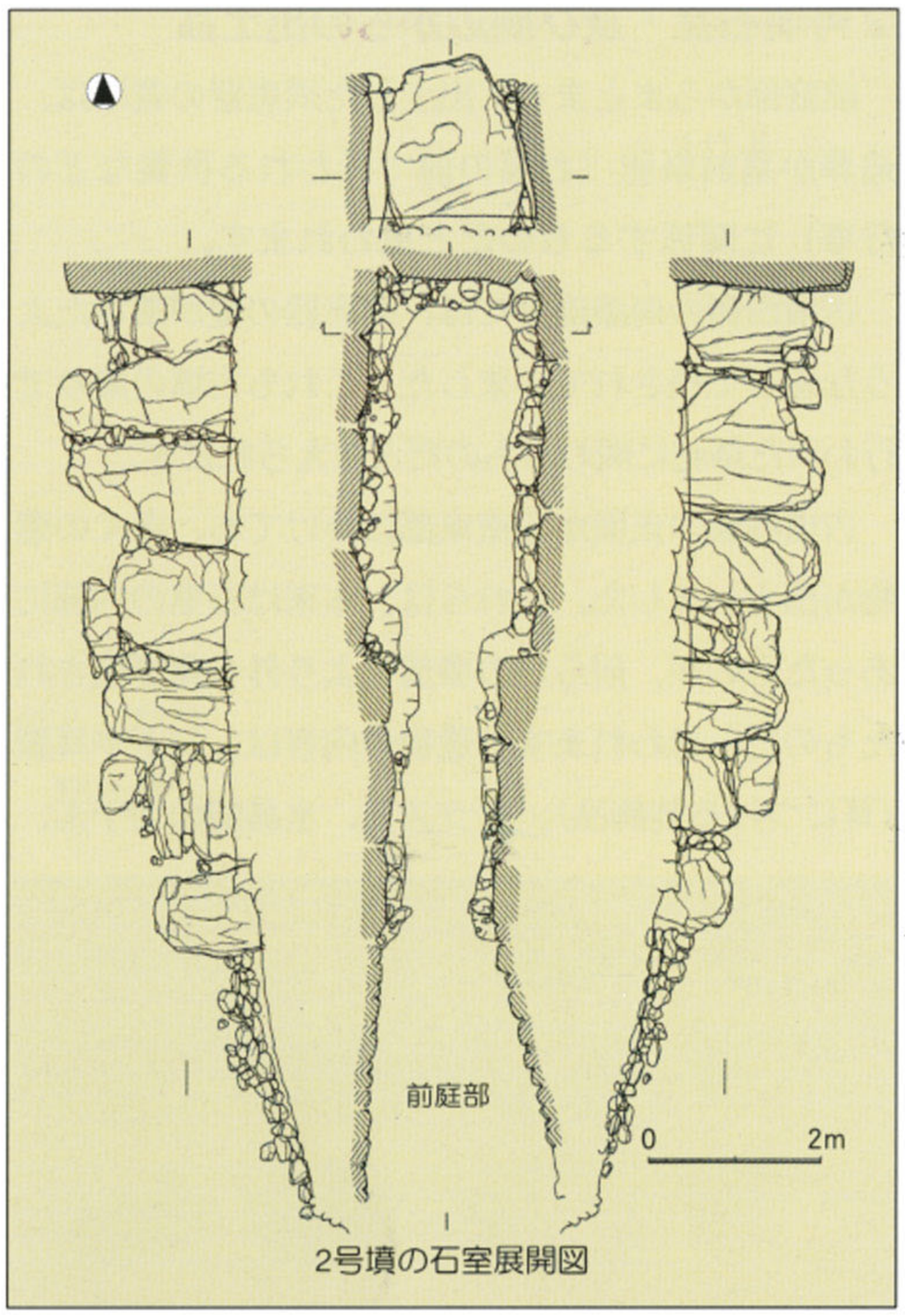
2号墳

直径16.9メートルの円墳で、上下２段の構造になっています。それぞれの段には、外護列石（土が崩れないように土留めをした石垣のようなもの）が巡らされています。斜面に造られた古墳ですので、下段でおおよその水平を造り出してから、上段に土を盛って築いたようです。また、古墳の周辺には、浅い周濠（水は入っていません）が一周して造られています。

石室は、両袖式（中央の両側に段をもつかたち）の横穴式石室で、前庭部（一番前の部分）は、「ハ」の字型に開いています。全長は10.68メートルと規模は大きいです。石材のひとつひとつも大変に大きいのが特徴です。石材の下部は、地面に差し込むようにして立てられ、小さな石で固定されています。天井の石は、残念ながら外されて無くなっていました。

石室の中には、ほとんど遺物は残されていませんでした。しかし、石室入り口の前庭部に、須恵器の蓋坏（蓋と身がセットになる容器）がまとまって残っていました。そして、石室の外である周濠の中から多くの遺物が出土しました。

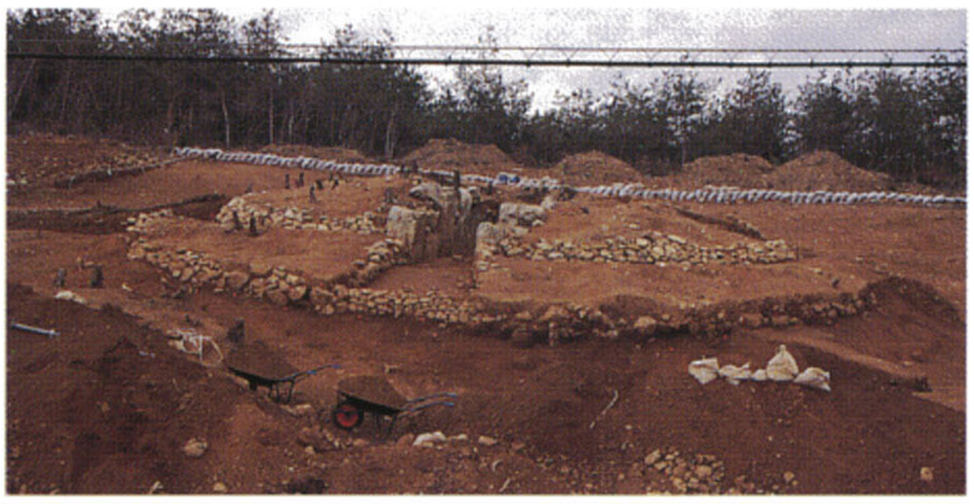
これらの出土した須恵器の特徴から、この２号墳は、６世紀末に築造され７世末までの長い間、連続してかどうかは分かりませんが、使用されていたと考えられます。



2号墳の石室展開図

勾玉出土状況

2号墳石室の近景


2号墳（前方）

2号墳（後方）

2号墳石室・及び周辺からの出土品

前庭部からまとまって出土した須恵器の蓋坏は、追葬か墓前祭祀（お墓の前で行われる供養などの行事）に関係するものだと思われます。

古墳西側の周濠部分には、須恵器の甕が潰れたような感じで残されていました。これも古墳の周りで行われた祭祀に関わるものだと考えられます。

古墳周濠の正面から南東部にかけても、多くの遺物が出土しました。これらは、本来は石室の内部にあったものが、何らかの事情により外へ運び出されたものだと思われます。遺物の内容は、勾玉や耳環（耳につける装飾品）、ガラス玉、水晶製の切子玉、そして須恵器の蓋坏などです。

石室の内部からは、室町時代や江戸時代の陶磁器も見つかっています。やはり、１号墳と同じく、石室の再利用が行われているようです。その時に、石室があばかれてしまったのだと考えられます。

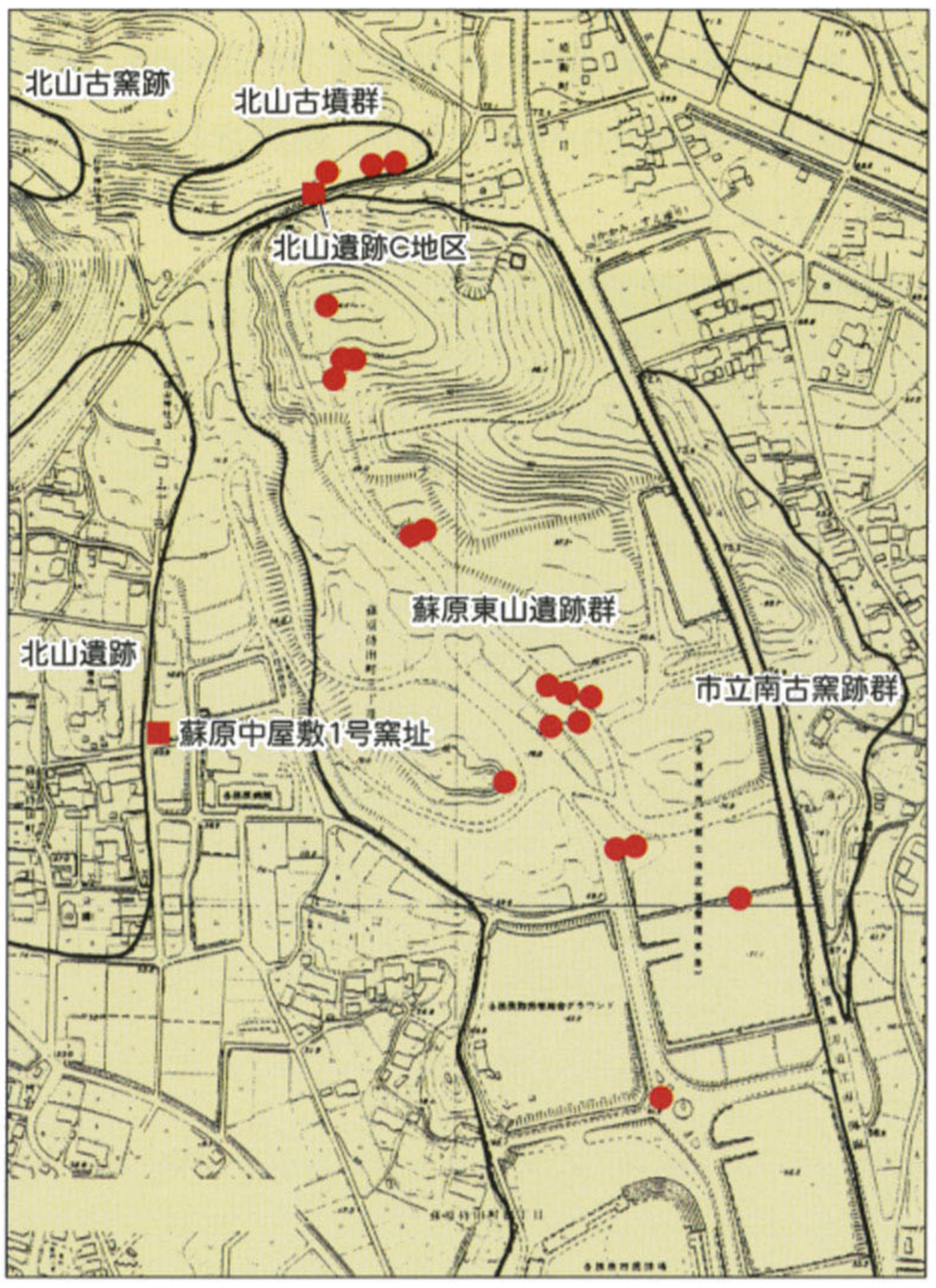
2号墳石室からの出土品

2号墳周濠からの出土品

まとめ

北山古墳群の周辺にも、多くの遺跡があります。蘇原東山遺跡群は、この北山から南へ伸びた広大な尾根上の遺跡です（現在の東山ニュータウン）。この遺跡群では、弥生時代後期の墳丘墓、５世紀末（古墳時代中期）の円墳、そして７世紀末（古墳時代後期）の円墳が確認されています。北山古墳群は、古墳時代後期でも６世紀末から７世紀という東山遺跡群の空白時期を埋めるため、合わせて、この地域の古墳の移り変わりをとらえることが出来そうです。

この地域は、７世紀に入る頃から須恵器の生産が本格化することが蘇原中屋敷１号窯址などの発掘によってわかっています。そして、８世紀に向けて急激に栄えていく須恵器生産に合わせて、古墳も増えていきます。このことは、これらの古墳群が須恵器生産を行う技術者たちの墓として造られたことが想像されます。奈良時代を迎え、８世紀に入って間もなく、遺体は火葬される方法などに切り替えられていくようで、古墳は造られなくなります。



北山古墳群と蘇原東山遺跡群